

猿新聞

シカの食害防止に効果 深水管理

滋賀県農業技術振興センターは、田植えから中干し期（6月上旬）まで深水管理を実施すれば、シカの食害を大幅に低減できることを明らかにした。普及に向け、現在は圃場での実証実験に取り組んでいる。

間もなく田植えが始まりますが、シカによる食害や踏み倒しが心配されます。水稲の柔らかい新芽は、シカの好物です。分けつ期までの被害は、収量や成熟にほとんど影響は与えませんが、中干し終了後の被害は、著しく減収するとともに成熟が大幅に遅れます。シカは、水中に口を入れて採食することを嫌う性質があります。

田植え直後は、苗がほぼ水没するくらい（葉先約3センチが頭を出す程度）の水深で管理をおこなない、稲の生育に合わせて水深を徐々に深くし、7センチ程度の深さを目標に中干しまで管理します。

苗のほとんどの部分を水中に水没させることにより、通常の浅水管理に比べ、茎葉の食害量を少なくできます。

水深を深く保つだけで費用をかけずに被害を軽減できますが、「あぜ」の保水管理が重要なポイントになります。群れで行動するシカは、

写真11 26年秋、シカの踏倒し被害（矢川で）



20〜30センチのほ場も食べ尽くしてしまい、大きな収量低下につながり、侵入による踏み倒しの被害も出ます。1〜2回食べられただけなら生育は盛り返しますが、味をしめたシカは何度も同じほ場に浸入し大きな被害を引き起こしますので、中干し前に、浸入を抑えることが重要なポイントです。（参考 農業共済新聞）

家庭菜園を守る

春野菜の季節です。春から晩秋にかけてサルが多発する季節です。被害は、主に中山間の自家用菜園に集中します。被害金額は軽微ですが、耕作者の精神的ダメージは大きく耕作意欲減退につながります。

自家用菜園は、栽培面積も狭小でジャガイモ、カボチャ、トマト、タマネギなど多種多様な作物を作っています。このような畑に、群れが浸入すると壊滅的な被害が出て、苦勞してサルの餌を作ったような結果になります。

畑が複数あれば、何カ所かの畑に分けて栽培することで、被害が軽減できます。『自分の畑は自分で守る』が、基本です。

サルの天敵は人間で、人間の存在を一番怖がります。頻りに畑にいつて人間の縄張りを誇示することが大切です。畑にサルを呼び寄せ

る原因は何でしょう？「盗っていいよ」といつているような無防備な畑が多くあるからだ

編集・発行者
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

思います。電気柵など防護柵は大きな効果がありますが、自家用菜園に多額の費用はかけられません。『ないよりまし』程度の柵でも浸入するときに手間がかかるので、それなりの効果が

あり集落全体が設置すれば、さらに大きな効果が得られます。数匹のサルに防護柵が突破されても、群れの数匹しかエサにありつけないような事態が続くと、エサ場と認識しなくなりいずれ来なくなりません。また、侵入に手間取っているところを人間に見つかって脅かされるなど、怖い目にあうことの多い集落をサルは避けるようになります。

作物を直接ネットで覆うのも一つの方法で、低木のかんきつ類などに効果があります。

畑にサルを呼び寄せるもう一つの原因に、畑に捨てた野菜くずや「残さ」です。人間にはゴミですが、サルにとってはごちそうで、放置は厳禁です。人がとらない放任果樹なども適切に処理することも大切です。

サルは、主に目を使って食べ物を探しますので、目隠し栽培が効果があります。畑の外縁にサルの好まない作物（ゴーヤー、唐辛子、シソ、コンニャクなど）を植え目隠しをし、中央部に目的の作物を栽培するという方法。例えば、畑の外縁にゴーヤーを立体的に植え、中央部の作物を目隠しするという方法です。

カボチャ、スイカなど「つる野菜」は立体栽培で防除をしやすいのも一つの方法です。つる野菜は、柵の外に結果させないように気を

つけてください。捨てた野菜くずや「残さ」はコンポストで処理をしてください。コンポスト購入時、補助金が出ます。詳細は名張市環境課 担当者 三宅（電話 637496）

〇サルの好まない作物は、地域によって異なります。例えば、キウイは名張付近では今のところ食べませんが、ある地域では大好物など、群ごとの食性に差があります。

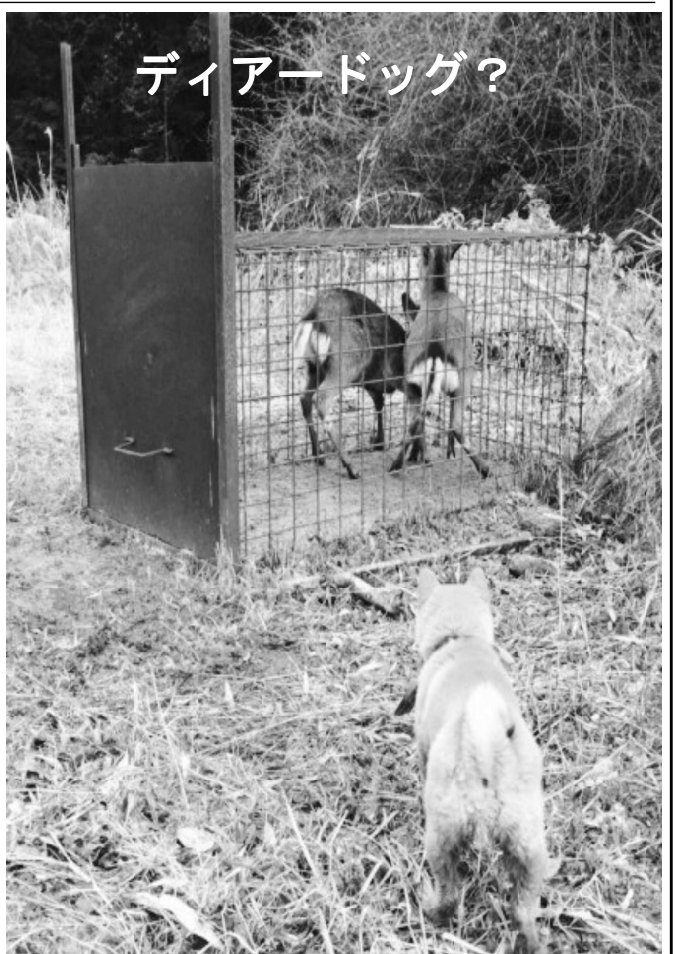
つけたい野菜は、柵の外に結果させないように気を

サルによるニンジン被害 ◎左の唐辛子には手を付けていない。（矢川で）



トウガラシ

ディアードッグ？



ディアードッグ？

長野県伊那市の取り組み

シカやクマなどが農作物を荒らす被害を少しでも減らそうと、同市は、アイヌ民族が古くからヒグマやエゾシカの狩りに用いた北海道犬の子犬を購入し、訓練して野生動物を追い払わせる試み始める。飼い犬を追い払い犬として訓練する費用を補助する市町村はあるが、自治体が自ら子犬を購入して「助っ人」にするのは県内初。最も適した時期に訓練し、優秀な犬を育成するのが狙い。参考：「YOMIURI ON-LINE」

『箱罫で一挙に2頭捕獲。宇陀市深野で』写真右＝撮影・提供：MD倶楽部代表 達氏 犬は達氏の「次郎長」（川上犬）

アライグマ 捕獲を続けて4年

近年、アライグマが一般家庭や社寺の天井裏に侵入したり、農作物を荒らすといった被害が増えています。矢川でも、平成24年頃から家庭

矢川の田中源二さんは、自家菜園のスイカの食害に気づいたのは、平成24年6月頃。即時、農林資源室から、捕獲おりを借り受けアライグマの捕獲を開始。以来、4年「獲りも獲つたり」アライグマ22匹、タチ24匹タヌキ1匹。

この間、アライグマの生態や好む餌などわかっていないことばかりで、試行錯誤を重ねながら4年間、続けてきたといわれます。また、「獣害対策は、諦めたらおしまい、根気が

が必要で。捕獲については、飼猫など誤捕獲には十分な注意が必要で。タヌキとよく似ているので要注意。アライグマは、シッポに黒色の輪の模様があるが、タヌキは輪がなく、先がほぼ黒い。イタチ（メス）・タヌキの捕獲は禁止されています。養魚池などで被害を出すイタチなぜ益獣？イタチ雌雄の見分け方は同色だが、オスはメスの2倍程体が大きい。

モンキードッグサル追い体験録

モンキードッグ倶楽部

島山 ひさ子

私は、一ノ井の地に居を構えて15年近くなりです。当時は、森の緑の中でサルやシカなどの姿を時々見かけられ、人と野生動物が等しく自然を享受し共生・共存が成り立っていて、なんと自然豊かな地域と、感嘆したイメージの時もありました。

それが犬との散歩をするにつれ共生・共存のイメージが崩れ、サルが農作物を荒らす現実を間近に目にすると、畑に荒らしたとき、畑仕事には縁のない私でも腹立たしい荒らし方でした。獣害は耕作意欲の喪失につながる、ということとを痛感できた被害状況で、これが私にサル被害の防除を強く認識させた切っ掛けでした。

平成21年夏に「宇陀・名張地域鳥獣害防止広域対策協議会」が募集したモンキードッグ（以下、MDと呼称）育成訓練1期生に我家の犬2頭が応募し、半年間、飼主と犬ともに訓練をへて、翌年4月、2頭ともMDの認定を得て5年。主たる活動区域は、居住地の赤目町一ノ井と隣接の矢川地区。

矢川地区では、飼主・MDともども、土地勘がなく、追い払いは市からいただいた住宅地図を見ながら始めました。

市や地元からの出動要請が何度かあり、時間の許す限りMDを野に放ち追払いを続けましたが、私の不在時を狙う様に

者の方だったのでしょう。サル脅しの花火をパンパンと上げておられました。が、「ああ、よう来てくれたなあ」と喜んで頂いた笑顔が印象に残っています。「イヌは花火音が苦手」と知っておられ、私が申し出るまでもなく直ぐに花火打ち上げを止めるといふ配慮もして頂きました。

こうして単発的な追払いだけでなく、地道に重ねた日々の散歩を兼ねたパトロールが功を奏したのか、2年目を以て、矢川でのサルの出没が徐々に少なくなり、大きな群れは矢川には来ていませんが、「離れサル」は時々出てきて食逃げしているようです。

我家のMD2匹のうち1匹「モミジ」が死亡して、元野良犬の「シロウ」に代替わりしております。シロウもMD認定試験の合格を受け、昨年9月にサル追い払いに出動しました。久しぶりの為か、山中を団十郎と共にサルを追い駆け、枝に絡んだロングリードを噛み切つて、春日神社裏山方向に逃走したサルを追走し、はるか離れた上三谷のハイキング道近くでやっと見付け、回収するという出来事もありました。

今はハナレザル対策のため、「よく出る」と聞いた集落地内の道路を朝の散歩を兼ねてパトロールしていますが、ハナレザルを追いかけたのは一回だけです。

矢川でサル群れ襲来が少なくなったという事で、散歩中、会う人ごとに「ありがと」や「ご苦労様」という言葉をかけ

て頂き、我家のイヌともども、毎日楽しく気持ちよく散歩をさせて頂いています。掲示板に貼られていた「オアシス運動」を地域住民の皆さんが実践されているのだなと感心しています。

今後ともMDに対するご理解とご協力を切にお願致します。

鳥獣害対策協議会が、3月30日19時半から錦生公民館で29名が参加し開催されました。

出前講座は本年から始まり今回で5地区目。名張市からは関森室長、福喜多・井上氏ら3名、「シカ・イノシシ捕獲数」においては、26年度では平成24年度にくらべ約3倍の実績。これは宇陀・名張市猟友会との連携効果もある。メッシュ柵設置も60地区12万メートルほど設置。また、サル対策に関しては「サルどこネット」の活用。

平成21年度から取り組んだモンキードッグも現在24頭が活躍。成果の出ていた地区もあり、モンキードッグ育成は本年度も予定している。などの説明がありました。

市の獣害対策の取り組みの説明に対し、質疑や要望などが活発に議論され終了予定時刻を20分もこえる盛況で、錦生地区の鳥獣害に対する取り組みに熱意を感じました（取材 島山ひさ子）

鳥獣害対策 出前講座

名張市農林資源室主催「錦生地区出前講座」。

鳥獣害対策説明会が、3月30日19時半から錦生公民館で29名が参加し開催されました。

出前講座は本年から始まり今回で5地区目。名張市からは関森室長、福喜多・井上氏ら3名、「シカ・イノシシ捕獲数」においては、26年度では平成24年度にくらべ約3倍の実績。これは宇陀・名張市猟友会との連携効果もある。メッシュ柵設置も60地区12万メートルほど設置。また、サル対策に関しては「サルどこネット」の活用。

●出前講座資料より シカ・イノシシ捕獲について (左図上参照)

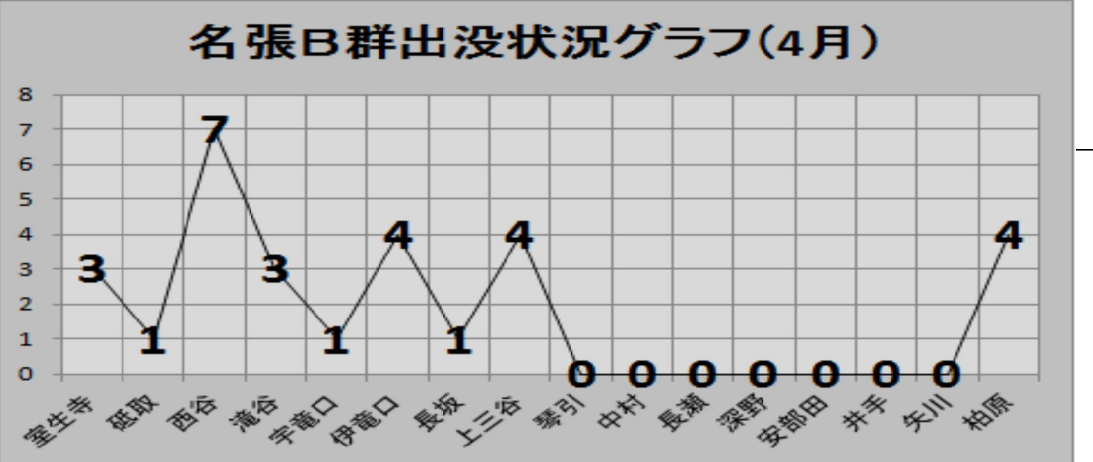
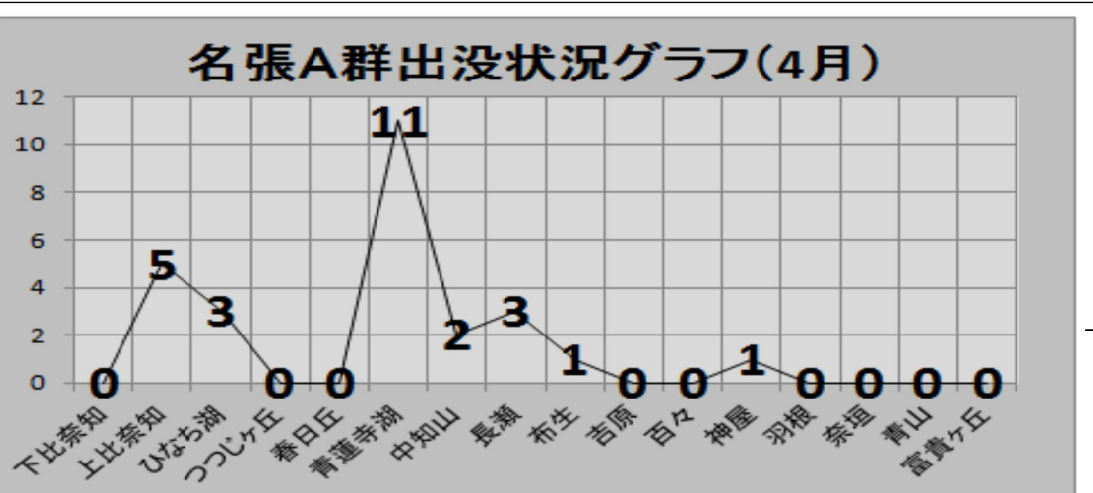
H22	シカ	121頭	イノシシ	33頭
H23	シカ	78頭	イノシシ	15頭
H24	シカ	113頭	イノシシ	23頭
H25	シカ	207頭	イノシシ	44頭
H26	シカ	331頭	イノシシ	95頭

(捕獲班) し、個体数調整を実施している。アライグマ、ヌートリア捕獲について (左図下参照)

H22	アライグマ	34頭	ヌートリア	30頭
H23	アライグマ	29頭	ヌートリア	9頭
H24	アライグマ	43頭	ヌートリア	10頭
H25	アライグマ	46頭	ヌートリア	5頭
H26	アライグマ	69頭	ヌートリア	0頭



出前講座風景 於、錦生公民館 (3月30日撮影)



リアの特定外来生物については、「名張市鳥獣被害防止計画」に加え、「名張市アライグマ・ヌートリア防除実施計画」を策定し、狩猟免許を持たない者でも捕獲従事者登録をすることにより一定の要件のもとで捕獲の実施が可能となっている。また、捕獲檻についても貸し出しを実施している。

被害を軽減するには、捕獲による個体数調整が必要である。野生動物を適切に管理するということは、多すぎて被害が深刻になる過密レベルと、少なすぎる過ぎて絶滅が心配される過疎レベルとの間で個体数を管理するということが必要である。

サルの出没状況 名張A・B群

出戻回数が増え、多くの農作物が被害を受けるというのは、その集落の多くの畑が、防備などに欠陥を抱えたまま耕作しているという点に他なりません。

左グラフをご覧下さい。グラフの山が、高い集落は、防除などに何らかの対策があるかも？

また、これから初夏にかけて青蓮寺湖周辺の桑の実、比奈知湖畔のニセアカシアを狙って、大挙集中します。隣接集落は注意して下さい。

指南員報告

4月サルの動向

A群は、冬場の集落地の菜園や保存野菜等への依存傾向から脱して樹木の萌芽やサクラ等の花弁の採食に変わりつつあり、遊動も両ダム周辺が中心になってきています。

B群は、先月と変わって国道165号線の南側を中心に遊動していますが、採食傾向は、A群の様な顕著な変化は見られず相変わらず、集落地内の菜園や家屋内へ侵入しています。先月と同様ですが、今月も管理不十分な農業用倉庫や物置に執着した行動が見られました。

★獣害対策指南員は、本年度も昨年同様、井上康秀氏が担当されます。